

二級ハ 土志田孝之助、徳田 實、五島勇雄、村越信行、富澤康吉  
一級ハ 清田惣三郎、木下革作、山口欣一、河田藤雄、岩上喜三郎

## 三 昭和二年史

### (一) 卒業生送別紅白勝負

二月十一日

(紅)

(小體落刈)

磯

邊  
山  
乳

(白)

堀  
浅  
大  
日

向  
本  
井

(押込)

(拂腰)

(大外)

(背負)

佐  
大  
羽  
岡  
清

(内股)  
小外投股

(背合業)  
背負

塚  
田  
室  
塚  
堀  
浅

田  
森  
新  
石  
田  
武  
手

木(俊)

栗(内股)

出(大内)

藤  
市  
田  
野  
川

木  
山  
井  
澤  
鈴

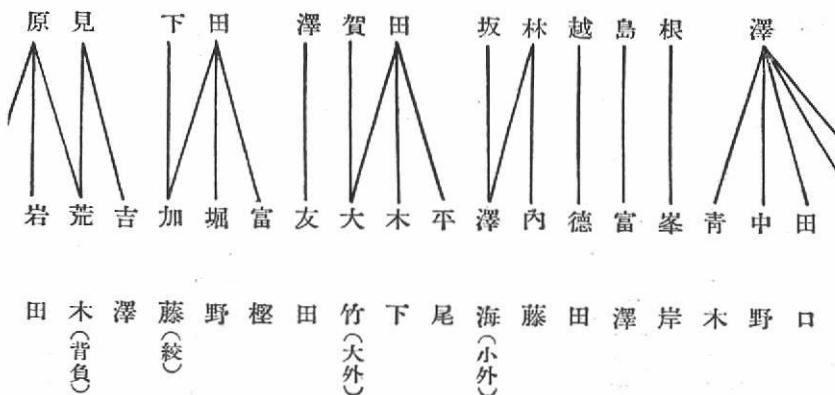
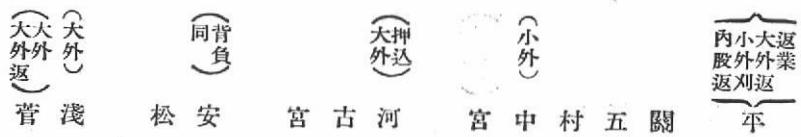
木(清)  
(拂腰)

田  
野

村  
矢

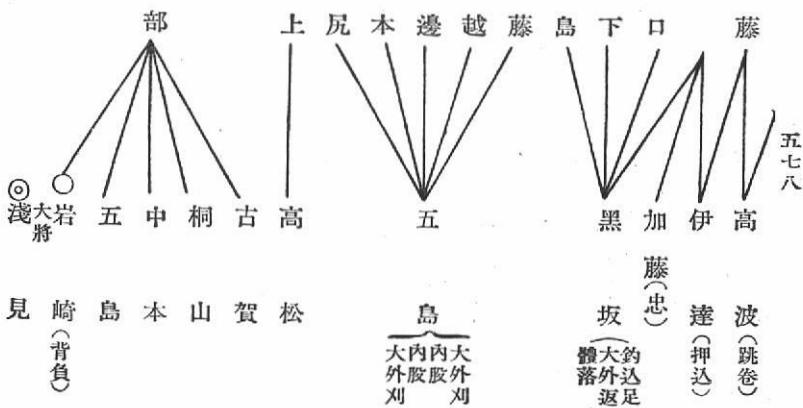
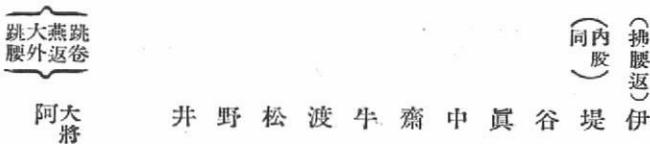
名  
村  
村  
矢

取  
田  
野



田 木 澤 藤 野 横 田 竹 尾 海 藤 田 澤 岸 木 野 口

(背負)



(三) 新入部員歓迎紅白勝負

五月八日

(紅)

阿 部(泰)

橋(榮)

飼(内股)

腰

(押込)

腰

木

村(三)

高

川

橋

鈴

木

木

見

田

野

(大外)

木

(膝  
腰  
車  
投)

藤 尾 阿  
村(誠) 島 部(泰)

吉 岡 矢 高

飼(内股)  
腰

腰

木

村(三)

高

川

橋

鈴

木

木

見

田

野

(大外)

木

村(仙)

岡 原

飼(内股)

腰

腰

木

村(清)

高

川

橋

鈴

木

木

見

田

野

(大外)

木

久 林 形 吉 矢

飼(内股)

腰

腰

木

村(仙)

高

川

橋

鈴

木

木

見

田

野

(大外)

木

室 堀 山 中 上

飼(内股)

腰

腰

木

村(仙)

高

川

橋

鈴

木

木

見

田

野

(大外)

木

川 堀 山 中 上

飼(内股)

腰

腰

木

村(仙)

高

川

橋

鈴

木

木

見

田

野

(大外)

木

吉 磯 山 浅 新 田 新 田 小 知 木 村 久 林

飼(内股)

腰

腰

木

村(仙)

高

川

橋

鈴

木

木

見

田

野

(大外)

木

(押込)

吉

磯

山

浅

新

田

新

田

小

知

木

村

久

林

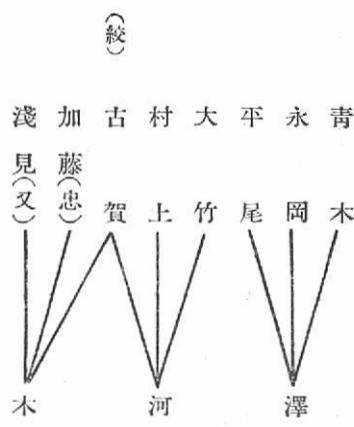
形

吉

岡

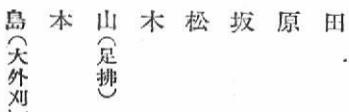
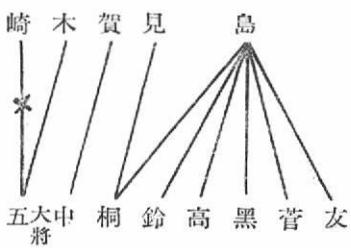
橋

鈴



大大大同  
大外刈内返刈

岩大蟻  
古 淺



### (三) 對四校聯合勝負

六月十八日於立正大學講堂。

(時間 段外四分、有段者五分、副將六分、大將八分)

(本塾) (聯合軍)

(前略四十四名)

寺 青 木 島 木 青 木 木 木 木

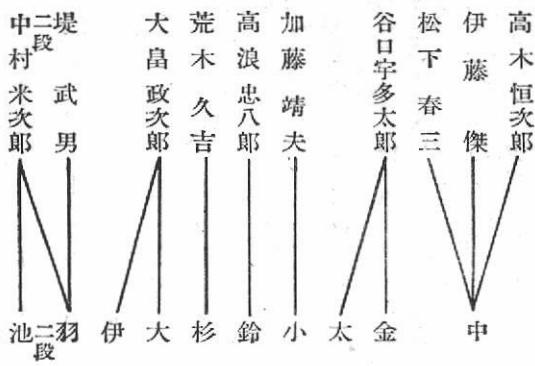
岸初友段 田善二郎 貢 賢 夫 丸初奥段

川 村

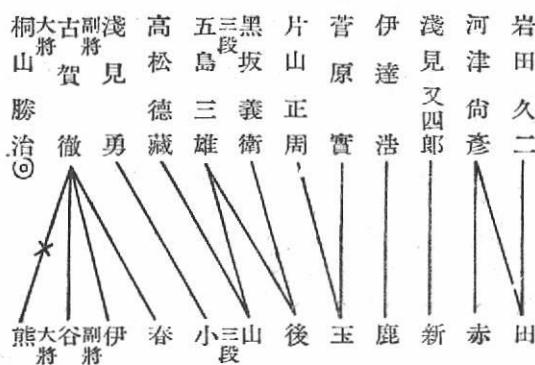
普通部對商工部試合

十月三十日

(四) 第三十七回大會



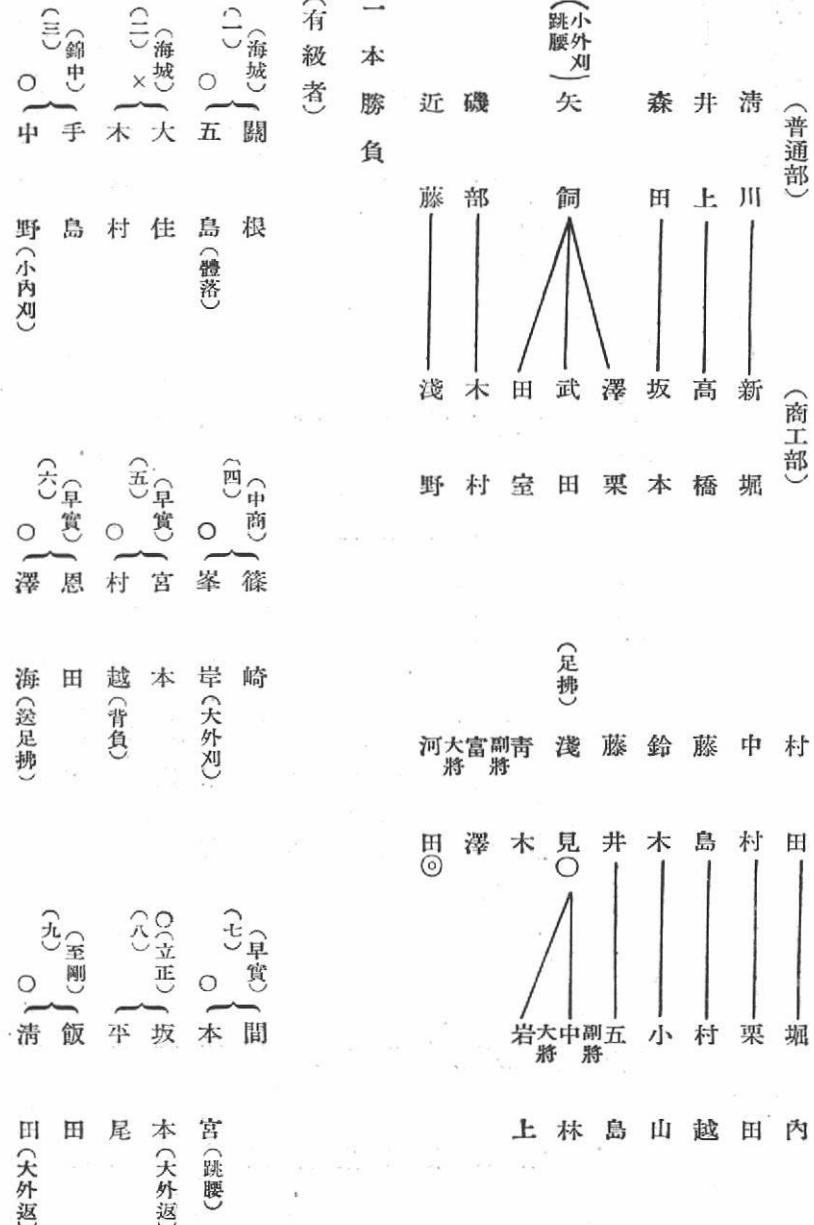
子田林木浦關藤田



邊塚原井木藤岸泉日東口倉

(普通部)

(商工部)



(一〇) 中  
木 友

地  
下(大内刈)

(一二) 川  
土 田

志  
田(拂腰)

投之形  
極之形  
表之形  
裏之形  
岩五  
崎島  
三本  
吾賀  
一徹

實  
苔原  
島三雄  
次郎  
雄

固之形  
五之形  
中古  
本賀  
吾一

下  
山(背負)

形  
起倒流古式之形

淺見  
桐山勝治  
見  
勝治

勇  
治

(立正)  
○(早大)  
加能 桑 中

(二) 中  
桑 谷 原 谷

原  
(内股)

(五) 中  
○(高工)  
谷 羽 堤 栗

中  
吉 吉 苞 中

下 原 原 田(背負)

(立正) 本 村 (警) 日 浦(内股)  
 (七) × 高 木 桐 山  
 (警) 小 川 島 古 寺  
 (八) × 見(勇) 淺 岛(三)(大外返) ○ 古 贺(大内刈)  
 (日大) 島 嶺

## (五) 雜記

太田次雄

九州夏季合宿記  
在九州先輩の勧めに従ひ、今夏の合宿は九州である事になつた。今迄と違つて稍々遠過ぎる様な感じがしたので、どれだけ人が集るか心配だつたけれど、約二十名の参加者があつたのは嬉しかつた。

七月の十四日朝東京を立ち、翌日正午博多に着いた。二十七時間程搖られ通しであつたが一同皆元氣だつた。

稽古を武徳館とする筈であつたが、十七、十八、二十三、二十四の四日は、高等學校の爭霸戦や、中等學校の優勝戦等があつたので、修獻館の道場を借りて稽古をした。今年は吾々同志丈けの稽古で無く、十一月半ばに九州年中行事の一つたる、福岡熊本の對縣柔道試合に出場する福岡方選手等と、張切つた稽古が出来たので非常に面白かつた。得る所も可成あつた。それに中等學校争覇戦に於て、有望選手の塾入學を勧める事が出来たのは、此の合宿の大いなる収穫の一つであつた。遠い九州あたりまで來して合宿が、無駄に終らなかつたわけだ。

此の方面に來たのは始めての人が多いので、随分と方々見物した。それには一々先輩の方々が、暑い日中會社を休んで

迄、吾々の爲に案内の勞を取つて下さつた事は大いに感謝すべきである。或は未だぬけ切らぬ淡白な學生氣分を再び味はふと云ふ事は、先輩方に取つても愉快なことだつたらう。

二十一日後發隊として普通部の連中が四五名やつて來たので、夫迄賑かだつた合宿が尙一層賑かになつた。午前中はおとなしいが、午後から夜へ否寝る間際迄の騒ぎ方といつたらない。どうも朝の稽古が不足なので、餘つた元氣をそんな時迄持続するらしいのだ。若い者は美やましいと、歳の所爲にしてをさまつて見ても始まらないので、皆一緒になつて愉快に來る日／＼を送つてゐた。

特に内外兩方面に大いに活躍の跡が見えたのは、先づ中本氏。珍らしくも足を怪我して思ふ様な稽古も出來ず、その鬱憤を晴らす爲か目覺ましい活躍振り。相棒には毎日合宿を訪問して下された剣道部の松本氏。あれで足が悪くなかつたらと思つた丈けで冷りとするが、常に合宿の空氣を沈滯させず、若々しい元氣な氣分にしてくれるのは嬉しかつた。その中本氏も、來るべき四月には社會の人になられるのかと思ふと、何だか殘り惜しい様な氣がする。

二十二日早朝から唐津の見物に行つた、先輩古川氏が遊覽船を特別にして、大いに便利を計つて下さつた。

此處は今の大蔵林氏の出られた所と聞く。又藝で名高き清水靜文氏も此の灣内の一島から出られしとか。吾々はかかる懷しみある島々を眺め、七ツ釜の景を左に見、壁島に上り、又島々を見物し乍ら、肥前名護屋城址へと登つた。此處は既に人も知る彼の豊太閤が朝鮮征伐の折、前後七年の間、半永久的の設備を施して本營を置いた址である。

一同暑さと急な坂路との爲めの疲れを、茶店の氷水に癒して後四方の景色を眺め始める。本丸址の崖上に立つて前面を見れば、加部島を始め壹岐、對馬迄薄く見える。よく澄み渡つた日などは、遠く朝鮮の一角も双眼鏡裡に映るとの事、寛に感慨無量の城址である。一體此の松浦灣は古くから我對外關係の要衝として外交上、國防上、歴史上に最も重要且つ興味ある地である。滿人蒙人の來寇したのも此の附近であれば、又我歷史上最も大切な頁を占むる元の來寇も此處である。

文永弘安の兩役に約四萬の大軍が九百の兵船に分乗し、今の釜山より海路遙々、壹岐、對馬を侵して博多宮崎の邊迄、猛烈な攻撃をした事は既に何人も知る所、而もその博多の裏側が丁度松浦の地なのである。海路最も釜山に近いのが名護屋の邊なのである。天文以後、ポルトガル、オランダ等の西洋人が入つて來たのも此の地である。轉じて日本から海外へ向つた際も、此の附近は重要な根據地となつてゐる。神功皇后の三韓征伐の際も此處からだと傳はつてゐるし、遣唐使等も此處から出帆したと云ふ。事の眞偽は判らねど、彼の大伴狹手彦が矢張り三韓へ出征する時、情人の佐用媛が領布振山に別離を惜しんで、今之壁島の望夫石と化したと云ふ物語さへもある。して見れば秀吉が外征の根據地として名護屋を選んだ理由も自づと解けるわけである。風光明媚、且つ古より我對外的關係に防守共に重要な此の地、東には正邪善惡の活きたる鏡を面に見る太宰府神社のある此の地、斯る由緒深き土地に、夏季合宿中の一日を割いて吾々が清遊したと云ふ事は、大いに意義のある事であつた。

二十六日稽古後、學問の神と謳はれた菅公の靈を祀る太宰府神社に詣でた。色々の寶物を拜觀もし、又先輩宮垣氏の計らいで、御神酒さへも戴いた。學業成就のお守は皆忘れずに受けた。さぞ此の夏合宿に行つた連中は頭がよくなつた事だらう。

太宰府を出て一同觀世音寺へと向つた。此處には種々の國寶もあるが、中にも菅公が配所にあつて朝に夕に遙に此の寺の瓦を眺め、又鐘聲を聞かれて

都府樓縫看瓦色　觀音寺只聽鐘聲

と吟ぜられた有名なる梵鐘がある。今尙國寶となつて存してゐる。住職に頼んでその鐘聲を聞かせて貰つた。矢張り普通の鐘の音だ。然し天智帝の御寄進遊ばされてより以來、種々なる世相を樓上にあつて眺め乍ら、千二百五十年の間、常に變らぬ聲を放つて、或は菅公をなぐさめ、又は世人に時を告げ、春風秋雨、長年月を経た鐘かと思へば、ゴーンと夏の

夕の空にゆるやかに長く尾を引き乍ら消えて行くその音に、そぞろ感慨の情が湧いて来て、一種壯嚴な轟きを有つ様に思はれた。

二十三日には福岡三田會があり、その席に吾々一同招待された。又二十九日には先輩海東氏邸に晩餐に招かれた。三十日には介屋の大門を見物し、三十一日最後の稽古を元氣にやり、その晚盛大なる解散會を行つた。

二週間餘の長い日も、僅か四五日位の様にしか思はれなかつた程、今年の合宿は愉快だつた。全然倦きる様な事は無かつた。それは皆が元氣で充分氣が合つて共に同じ行動をし、愉快な気持ちで暮したからだ。之も皆塾の先輩諸兄が等しく吾々の爲にお骨折下さつたからだ。決して柔道部の先輩丈けでは無い。他の部の先輩の方々も皆一様に色々と心配して下さつたからだ。御禮の云ひ様も無い位。今年の合宿に加はらず、あの愉快なりし生活を味はなかつた部員諸兄は、來年の合宿には舉つて行く事を敢てお勧めする。

八月一日朝、長い合宿生活を終へ、九月又會ふ日を約し、吾々は各自好む方向へ向けて、三々五々九州の地を立つた。此の日吾々一行の別離を悲しんでかシト〜と雨が降つてゐた。(體育會雜誌第四卷所載)

(編者曰く、一行は飯塚師範の外浅見浅一、岩崎三郎、五島次雄、中本吾一、桐山勝治、古賀兄弟、高松徳藏、五島三雄片山正周、徳田實、永岡俊一等の諸氏であつた。)

## 東北武者修行の記

古賀徹

我が武者修行の一行岩崎、五島、中本、古賀、桐山、山形、伊達、松下、堤、加藤の諸君は、十月十四日午後十時半手輕な扮裝で上野驛頭に集合し、十一時二十五分の青森行の列車に乗る。七八年間途絶えてゐた武者修行の門出である。車内は案に相違して、まるで市電のラツシユアワーの様だつたので、いさゝか驚いたが、紅葉の日光、鹽原を訪ぶ人々で大

半占められてゐたので、二時過ぎた頃からやつと落ち附いて稽古衣を枕に座席の上に長くなることが出来た。白河を過ぎる頃夜は全く明放れて頗る好天氣、左の車窓遙かに遠山の白雪眺め、水田よりも割合に畑地の多い高原の中を汽車は走る。道行く人を見ても寒國らしい氣分がして來た。十五日午前十時十五分仙臺着、見覺のある東北學院の柔道部の方々に迎へられて、互に久闊を交しながら驛前の針久別館に入る。午後二時から仙臺高等工業學校の道場で、東北學院、高工並に中學の學生、それに市内有段者等四十人位と猛烈なる稽古をした。主に初段二段位の元氣な人々で、中には講道館でよく見かける相澤氏、高橋氏も見えた。仙臺は流石に東北柔道界の重鎮だけあつて、此等の人々の立派な稽古振りに底知れぬ強みがうかがはれた。

稽古終つて、東北學院の新校舎に案内されて茶菓の饗應にあづかつた。學院の柔道部長の鄭重なる歓迎の辭あり、續いて高橋氏相澤氏等交々立ちて所感を述べられ、後歓談に花を咲かせ、我等の知らぬ塾先輩の事などの話も出た。殊にK君は、商工の昔此の地に遠征して、大に勇名を轟し、東北學院大將菅野君の今日あるは、一にK君に負ふ所多く、延いては仙臺柔道界の發達もK君による所極めて大なるものありといふので、K君たる者頗る面目をほどこす。

それより同校自慢の新校舎を隈なく見せて貰つたが、なか／＼立派なものであつた。三階屋上では、青葉山や仙臺の市街平野を一眸の中にをさめて、眺望極めて佳し。薄暮四邊にせまる頃、自動車で送られて辭す。夜は皆打伴れて賑かな通りを少時散歩し、八時半寝に就いた。

眠る間もなく翌十六日早朝三時半起床、四時十八分青森行の汽車に乗つた。相變らず満員であつたが、すばしこい連中だからそれ／＼座席だけは見つけた。六時二十分小牛田着、此處で新庄行の列車に乘換へた。今度はがら空きにすいて居るので、先づ汽車辨で朝食をすませ、それから皆大きくなつて寝る仕度にとりかゝつたが、スチームが通つてないので、十月の半ばとは云へ北國の秋は可なり寒かつた。

途中の秋色なか／＼目を樂ましむるものあり、十時二十分新庄着、十一時再び車中の人となり秋田に向ふ。沿線は割合に平凡な景色なれども道行く人のモンペ一姿が目につく。三時過ぎ秋田着、伊達先生其他二三の先輩に迎へられて、直ぐ城址内にある武徳殿に行く。四時頃から稽古を始めたが、一行はなか／＼の元氣で、汽車の疲れも物かは、日頃鍛練の腕を充分に振ふ。主として附近の中學生それに市内の有志等五十人位も集つたが、有段者は割合に少なく、一二級位の元氣な人々が多かつたので、稽古は非常に樂であつた。秋田の人達は武者修行連に慣れてゐるのか、それとも稽古熱心の然らしむる所か、相手に息をもつかせず、次ぎ／＼に文字通りぶつかつて来る。自分の技を連發に仕掛けて来る所などは、大いに稱すべき點であると思つた。時漸く黃昏に近づいてゐたが、伊達氏に案内されて、すぐ近くにある老松古木生繁れる佐竹侯の城址に登り、電燈の光の點在する秋田市街を暮靄の裡に見下し、遠く残照に映する男鹿半島をかすかに望み、直ちに下山小林旅館に至る。今日の稽古には皆大分疲れたらしいが、伊達氏に贈られたビールは夕食の際に簡単に片づけ、林檎は明日の車中の樂しみとした。夕食後一時間ばかり市内を散歩して、十時半頃床に入つた。

翌朝（十七日）九時五十五分の神戸行急行に乗る。途中鶴岡で先輩菅原氏に會ひ、葡萄などを贈られた。この沿線平凡單調だが、佐渡ヶ島を臨む邊の景色は賞す可きものがあつた。新津で乗換へて新潟に四時二十分着、信濃川の長い木橋を渡つて大野屋に入る。生憎長岡で縣下の中等學校の柔道爭霸戦があるので、殘念ながら此の地の柔道を拜見することが出来なかつた。夕食後例の如く市内を見物す。

翌朝五時起床、急いで朝食を取り、六時の一番列車に乗り、長野に向ふ。直江津附近の勝景を三嘆したのも束の間、汽車は又單調なる平原の中を走る。二時十分長野着。新井氏に迎へられて縣廳内の巡査教習所に行く。土地の元老廣岡六段教習所長等に紹介された。暫時休憩の後新井氏に導かれて善光寺に詣づ。附近の名所舊跡を一巡して歸る。丁度四時半稽古衣に着替へて道場に行けば、七八十人位も集められてゐるので一寸驚かされた。中學生、教習所員並に巡査等で、初心

の人々が可なり多く、有段者が少かつたので、此處の稽古も割合に樂であった。終つて茶菓の饗應を享けて七時頃辭し去る。長野名物のそばで夕食を済まし、午後九時二十五分再び車中の人となり、一時間にして上田に着く。蠶絲専門學校の方々に迎へられ、直ちに自動車を驅つて三里餘の夜道を別所温泉に向ふ。柏屋旅館に入り、連日の疲労を癒しながら、ゆつくり温泉に浸る。

十九日は何日になく朝寝坊が出來た。午前中少し近所を散歩し、二時頃又自動車で上田の蠶糸専門學校に行く。蠶糸専門の方々や上田中學の方々と軽く稽古をした。皆少しく物足りなさそうであつた。六時頃此處を辭してから、驛前でゆつくりと最後の晩餐をとる、話は旅行中の漫談にそれからそれへと花が咲く。中にはニツクネームが一つ二つふえた人もあつた。

顧れば、此度の旅行は好氣候と連日の好天氣に恵まれて、楽しく愉快に終ることが出來た。この長途の汽車旅行にも拘らず各員皆元氣で負傷者一人も出さず、和氣藹々の裡に日頃鍛錬の腕前を十二分に發揮したことを、衷心からお互に祝福し合はずには居られなかつた。午後十時二十五分上野行の列車に乗り、翌朝（二十日）六時上野着。大東京の眠り未だ覺めぬ頃我々は一行の萬歳を三唱して別れた。（體育會雑誌第四卷所載）

### 進級一括

○二月中の進級者左の如し。

二級へ 平澤 明、峯岸弘次、中野英一、大市常次郎、名取洋之助、青木俊一  
一級へ 澤海東助、宮坂 中

○十月五日進級

二級へ 茨木義雄

一級へ 富澤康吉、中林久良、徳田 實

○十一月十一日附進級

二級へ 淺見 勇、星子義臣

○十二月一日の進級

二級へ 矢野進一郎

一級へ 青木俊一、土志田孝之助

## 三一 昭和三年史

### (一) 寒 稽 古

一月十四日より二月三日迄三週間毎朝午前四時半より例年の通り網町道場に於て寒稽古を擧行す。出席人員百三十名。皆勤者は八十餘名にして、其内精勤者四名には特に三田柔友會寄贈柔の友賞及び精勤賞を贈呈した。尙本年は左記の如く先輩の出席者多く、現部員に歎からざる刺戟を興へ。殊に終了式には林塾長親しく御臨席になり、一同を激励せられたのは、誠に空前のことであつた。

先輩出席者は峰岸、阿部(大)、阿部(英)、阿部(秀)、尾上、葉山、塚本(福)、岡安、野尻、木村、阿藤、五島、松本、